

2 日 目 補 足 講 演 及 び 討 論

司会(長田)：皆さんおはようございます。ご案内のとおり 10 時から 11 時半まで、3 人の先生から昨日の補足説明をいただき、その後 1 時間半ほどフリーディスカッションということに致します。橋元先生と秋山先生に最初に 30 分ずつ、その後、尾関先生にお話しただくことに致します。

橋元：おはようございます。

それではまず、私の方から昨日申し上げられなかった携帯電話、携帯メールの話について約 30 分お話しさせていただきます。

最初は、例によって調査データの簡単な紹介です。

まず、図に示したものが我々の 2 回の全国調査で、携帯電話および携帯メールをどのぐらいの人が使っているか、個人利用率を示しています。年齢は 12 歳から 69 歳です。この三角（で示しているの）がメールになりますね、それからダイヤ型（で示しているの）がメールではなくて音声通話です。これで見えていきますと、20 代は完全飽和で 9 割、例えば携帯電話に関しては 95% の人が使っている。首都圏では、大学生などで 100 人いて、使っていないというのは 1 人いるかどうかで、その人はよほど見識があるか変人かどうかですね。インターネットもだいたい同じような感じですが、違いはインターネットの方が 40 代 50 代も急伸しているということです。

それで、日本の特徴は、若者は音声通話をあまり使わなくなっていて、メールを非常にたくさん使っていることです。このメールの利用頻度は世界的に見て非常に特異というか顕著であります。

次の図は、だいたい週何回ぐらい、何通ぐらい発信しているか、(受信はスパムもあるの

でいい加減ですから発信で見ました)、自分で発信しているのをできるだけ自分の記録に基づいて回答してもらったものです。そうしますと、2001 年と 2003 年ではほぼ安定した数字で、10 代に関して言うのだいたい週 70 通で、平均 1 日 10 通です。よく使っている子だけじゃなくてほとんど使わない子も含めて 1 日 10 通ということは本当によく使っているということですね。20 代 30 代と年を増すにしたがってこの数字は減ります。

さらに我々は、一種のネットワーク分析で、同居している家族以外で親しい人を 10 人ぐらい詳細に書いてもらって、性別とか年齢とか、間柄とか、どのぐらいの頻度で会うのか、その人と連絡するのにどういうメディアを使っているのか、どのぐらい連絡しているのか、会うとすればどのぐらいの時間がかかるのかとかいうのを聞いています。「こういうのは面倒臭がって答えないだろう」と思われるかもしれませんが、平均で 5 人以上書いてくれます。

それで、2001 年、2003 年でどういうメディアを使っているのか。複数回答もちろん可です。親しく付き合っている人、これを知人と称することにします。知人は要するに、アンケートの表に書いてもらった人たちです。全部で 9,000 件、2000 年は、サンプルが減りますので、全件 6,200 件の分析ですね、そうすると固定電話が減ってやはり携帯電話、そして携帯メールでの連絡が増えている。Eメールはそんなに伸びないでむしろ減り気味。手紙も 5.5% でまあまあ健闘していますね。

さきほどの数字は複数回答の単集ですが、さらにこれをパターンに分けます。チャットとか手紙、ファクシミリは利用率が低い

で、固定電話、携帯の音声通話、携帯メール、Eメール、これらの回答の組み合わせでパターン化します。そうするとこの4種類で、ゼロも含めると16パターンある。どういう組み合わせで知人と称する人と連絡しているかですが、全体で見ますと、やはりまだ固定電話だけで連絡するというのが多くて、第1位、でも比率は2001年から2003年にかけて減っています。第2位は携帯（通話）だけというので、14.6%です。第3位が携帯プラス携帯メールですが、これを20代について見ますと、かなり変わります。20代では、2001年時点で一番多いのは、携帯プラス携帯メールの組み合わせですね。これは2001年の時27%だったのですが、今まではこの2つを使うのが主で固定電話はあまり使っていません。2位が携帯メールだけで非常に数字が上がっている。3位が携帯通話だけということですね。この傾向は数年後もっと増幅されると予想され、固定はどんどんどんどん寂れていく。携帯メール単独もさらに伸びるだろうと予測されます。

ただ、人はいろいろメディアの使い分けをしています。例えば、同居していない家族、実家の人とか、離れた家族には固定電話を使う、親戚も固定を使う。遠い関係は固定を使い、近い関係になると携帯電話や携帯メールを使う。同じ携帯でも、恋人などのより親しい関係ですと、コストにもかかわらず音声がよく使われる傾向にあります。やはり音声の持つ身体性を求めていることかなと思います。

さらに次の図は恋人友人に限定して、どういうメディアを使っているのかを見たもので、やはり20代は携帯の音声もよく使っていますね。一般的にいうとメールを良く使うのですが、恋人、友人に関しては、両者併用で、恋人だけに限定するともっと音声を使う率が高まります。

次の図は、さっきのネットワークをさらに

分析して、それぞれのメディアの特性をみたものです。同性率というのは、1が完全に連絡相手が同性ばかり、ゼロが完全に異性ばかりになります。例えばEメールは結構異性の相手と使う。しかし、比較的对手との年齢差が大きい。それから、年齢差でいいますと、携帯メールというのは、親しく近い年齢の人、同じような年層の人とよく使うメディアであるということが分かります。

それから対面頻度、つまり週何回ぐらい実際に会っているのか。これで、携帯メールは週平均1.98ですね。つまり、携帯メールをよく使う人ほど、よく会っている。これは別の分析でも言えたことですが、たくさん携帯メールを発信する相手と頻繁に会っているということです。ですからメールだけでコミュニケーションしているわけでないということです。かつ、携帯メールは連絡回数も多い。距離的なことでいいますと、Eメールはやっぱり遠い距離の人と使うメディアであるということが数字でも表れている。携帯は固定に比べて近い距離の人とコミュニケーションをするメディアです。

次に、なぜ携帯電話が支持されたのか、爆発的に普及したのか。最初に、従来言われてきたことプラス私自身いろいろなところで書いてきたことを一通り申し上げます。後でちょっと否定しますが。

1995年頃から伸び出して、2000年ぐらいに爆発的に普及し、その頃よく書いたことで、社会心理的な、メンタル的な要素があるのではないか。一つに70年80年代を通して、ずっと孤立化を促進するメディアが先行的に市場に出回った。ビデオとかウォークマンとか、特に典型的なのはウォークマンですね。しかし、もともと人間はソーシャルなものだから、ソーシャルなコミュニケーションを求めているのにそれを促進するメディアが市場に投入されなかった、その間隙をぬったということです。

それから、戦後の日本の歴史でいうと、若者からたまり場を追放する歴史であった。たとえば、学校は教育的機能以上にサロンの機能が大きい。これは日本に限らず、近代西洋でも全部そうですが、日本の学校を見てみますと、例えば、中高なんかでは、放課後残っていると、最近は「早く帰りなさい」と怒られます。それから、今は公園でも遊べないですよ。また住宅事情から人の家に遊びに行くことが少なくなかった。コンビニの前にたむろしていたら、不良と思われるお巡りさんに通報されたりする。居酒屋行くにはまだ早い。要するに、遊び場、たまり場が追放されて、携帯がそこにバーチャルなたまり場を提供したんじゃないか。

次に青少年のメンタリティの変化、例えば、その日、その一瞬が楽しければという刹那的享楽主義、あまり先のことを考えないという傾向が、年々ある種の時代効果として表れている。これは、東京都の経時的な調査などでも確かめられている。先のことを考えてもしょうがないような社会になってきて、国民全体的に生活目標を喪失してきたとかいろいろな要因があると思います。今、この場だけを大切にしたいというそういうパーソナリティに携帯というメディアがフィットした。

それから、最近の若い人ほど、第3者には無関心だが、むしろ親しい相手には非常に細かい気配りをする。例えば山登りは嫌いだけれど、誘われたらどうするか。断らないで行くって言うのは、70年から一貫して増えているんです。身近な人には細かい気配りをする、人を傷つけない配慮、これは確かに調査でも出ています。私生活中心主義といいますが、これは一つには地域近隣のコミュニケーションの喪失ということや、少子化で過保護に育てられているということが影響しているのかもしれない。携帯は、そういう身近な相手に対する細かい気配りというのが可能なメデ

ィアであるということ。

それから、上司、親、先輩からあれこれ言われるのを非常に嫌うようになってきた。これも調査の数字からも言えます。親にも見られずに聞かれずにコミュニケーションできるツールが携帯であったということがある。

さらに「孤独」そのものではないんですが、孤独になることを非常に不安がる。いわば「孤独不安神経症」の傾向も増えている。そういう背景があるんじゃないか。

それから、音声に関していうと、耳に当てて、こそこそと耳打ち感覚でささやく、そういうのは、一種の性愛的な意味を持っていたのではないかと。

また、今や携帯はメモ帳、時計、カレンダー、住所録いろいろな機能を果たして、まさしく完全にパーソナルなマルチ・モバイル・メディアとして皮膚のような感覚で持ち歩いている。携帯にはそういう部分があったんじゃないかと。

それから、自分探し。今、若い人は自分のアイデンティティを、人との絶えざる交流というか、連絡で初めて確認できる。人の評判で自分を決めていくという意識が強くなっているのですが、そういう他者依存の自分探しにピッタリフィットしたんじゃないかと。いろいろそう私が書いたりあるいは人が言ったりしてきたのですが、実は、私は現在、今言ったことすべてに対して非常に懐疑的になっている。

なぜかと言うと、先に述べた、例えば日本的な特徴で、若者が【こうなっている】というところ。これは調査的な数字でも「メンタリティ」の変化として言えるのだけれど、携帯の普及をこれと結びつけることは妥当かどうかということですね。説明として、一部の人は、なるほどと思う人もいてくれたのですが、ただ、日本だけではなくて、韓米欧全て、いずれも若者の間で携帯が支持されてきている、爆発的に普及しているのですね。結局、

問題はコストと便利さだけ、社会的な資本が整備され、コストが下がり、使って便利ならみんな使うんですね。

ですから結局、携帯に関しては、文化的特性や日本的なメンタリティ、若者の心性から説明してもナンセンスじゃないかと今は思っています。

例えば、自動車の場合でも、例えば乗り物の歴史とか、道に対する思想とか、いろいろなことが文化的に言われています。しかし、自動車に関して言えばコスト的に釣り合って社会資本として道路が整備されればどこでも普及する。なぜ普及するかというと、一言で言えば便利だからですね。普及しないとすれば、高いかあるいは他の交通手段の方が便利で安いからですね。

ですから、実際携帯に関していえば、いろいろなことを心理学者、社会心理学者、社会学者は僕も含めて言ったりするけれど、本当は、理由はもっと単純じゃないかと思っています。

ところで、携帯メール、これに関しては、日本で、まだ非常に先行的に高頻度で使われています。その理由についてもいろいろ考えてみましたというか、いろいろなことが言われています。

まず、コスト的なものですね。携帯音声通話よりも圧倒的に安い。状況的制約でどこでも話せる。それからメールの方が相手に合わせてその場で応答する面倒がない。自分の心情を見せないようにできる。自分の動静、声だと分かりますがそれが悟られない、こちらの状況も分からない、そういう気安さがある。それから音声の場合は相手の世界にいきなり入っていくという暴力性があるけれども、それがない。それから精神的自己防衛、つまり、まず相手が受信可能なのに、音声だと「出てもらえなかったらどうしよう」、それから「出て、誰か相手が他の異性と一緒になったらどうしようか」とかですね。「他の友達はみんな

集まっているのに、自分だけ声かけてもらっていないことが分かったらどうしようか」とかね、そういう精神的ショックを回避する、精神的自己防衛的なところがあるのではないかな。例えば、依頼にしても、音声だとすぐ答えが返ってくる。そうすると、場合によっては非常に心理的ショックを受ける可能性がある。それを避けたい。そういう傷つくことに弱い若者の心理にフィットしたのではないかな。この最後の説明も、結構うける説明なんですけど、今では僕は、あまり妥当しないと思っています。この精神的自己防衛については、また後で言います。結局、メールの場合も基本的に90何%はコストで説明できる。例えばアメリカ、韓国ではメールのコストが高いんですね。日本はご存知のとおり圧倒的にメールのコストが安くなってありますね。これでほとんどが説明できると思います。

それから、時間的な余裕、要するに暇ってことですね。10代が（多く）使っていると言いましたが、やっぱり10代は暇だから使うのです。別に何か用件があって使っているわけじゃない。

それから日本の特殊事情として、通学時間が長いということがあります。それから住宅事情として自分の部屋も少ないし、限られた空間で友達とコミュニケーションできる数少ないコミュニケーションツールということがあります。それから遊戯性、遊び感覚の問題。それからやはり同調志向、流行追随。さらに持っていないと、あるいは絶えずメール交換していないと仲間から外されるという、仲間であることの儀礼性というのがありますね。結局、国民レベルの文化的な要因は、いろいろ言ってもほとんど消えていくんです。他の文化でも同じような発展を遂げるという事実があれば、文化的要因は説明要因にならない。結局、最後まで残っていくのは些末な理由になってしまうのではないかと今では思っております。

次に、人の付き合い方とメディアの利用について簡単に紹介します。これも一部通説とは逆のところがあります。

まず、自己報告の数字ですが、先のネットワーク分析でリストアップされた知人友人数というのはむしろ若い人の方が多い。特に自分にとって「友人」と呼べる人の数は、若年層の方が多い。よく最近の若者は、コミュニケーションが希薄化している、友人が減っていると言うけど、むしろ最近の方が若い人でも友人数が増えています。

それから、腹を割った付き合いをしない、深入りしない。最近の若者の付き合いは浅薄だといいます。しかしそういう傾向は社会調査的には全然見られません。例えば、さっきの調査ですと、「友人とはプライベートなことも含めて深く関わりたい」か「プライバシーに深入りしたくない」の2択で聞きますと、2001年でも2003年でもほとんどリニアに若い人ほど腹を割った付き合いをしています。考えてみれば当たり前のことで、大人になるということは本音を隠すということですから、我々の年齢では、自分自身の付き合いだってもう今更、腹を割った付き合いはそんなにできませんよね。だからやっぱり高齢なほど腹を割った付き合いをしない、若い人の方が腹を割った付き合いをするんですね。これは経年的な数字ではないのですが、若い人は付き合いが浅薄だというのは、いわゆる「今の若い者は」的な発想で、加齢による偏見だと思いますね。また同じような質問ですが、「お互いの性格の裏の裏まで知っている」か「すべてをさらけ出すわけではない」かのどちらかという質問もしています。これもやっぱり10代を除けばリニアに若い人の方がフランクに付き合う傾向がある。さらに「友人とは互いに傷つけないようにできるだけ気を遣う」「傷つくことがあっても思ったことを言わない」の2択で、どちらかと言うと、やっぱり若い人の方がフランクに何でも言い合う。

これはたぶん文化普遍的、どこでもそうだと思いますね。

それから、「選択的接触」ということを若い社会心理学者、社会学者の方がよく言います。「若い人は情報縁で結ばれた関係がたくさんあって、いろいろな側面の自分、自我を使い分けしつつ多面的な付き合いをする。状況に応じて違う付き合いをするんだ」と言います。でも、調査ではその傾向は出ないんです。例えば、「大抵の場合、同じ友人と行動を共にする」か「場合に応じていろいろな友人と付き合いをすることが多い」かどちらかという聞き方をしても若い人ほどずっと同じ友人と行動を共にする。年齢的にリニアで、完璧に有意ですね。考えてみれば当たり前で、年取ったらいろいろな付き合いができるので、場面に依拠していろいろな付き合いをするということが言われるまでもなく妥当します。若い人は学校では物理的にいる時間も一緒だから、同じ友達とベッタリ付き合う。そんなに若い人は選択的接触をしていない。考えてみれば分かることなのに、なぜあれほど「選択的接触」ということが言われるのか分からない。次の表は、都市部ほど情報縁が多いという人が多いのでそれについて調べた数字です。上の数字は、選択的接触のイエスと答えた比率ですが、都市部ほど低いです。田舎ほどむしろいろいろな人と場面に依拠して違う人につきあう、いわゆる選択的接触をする。都市化で情報縁が増えて選択的接触をするというその仮説は、我々の調査の数字では完全に逆です。

メディアとの関係ですが、よく携帯とかEメールはオタク的なメディアで、精神的に自己防衛をしているから、心理的クッションとして使うとか、自分をさらけ出せない人が使うと、よく言われますが、調査の事実からはこれも全く逆で、平均的に見ていると全然そんなことは無い。まず利用、非利用でいうと、例えばプライベートの領域でいうと、結果的に携帯電話も携帯メールも、10代20代に限

定しても全体で見ても、プライベート領域に深く関わりたいと思っている人ほどよく利用している。それから「傷つくことがあっても思ったことを言い合う」ということで言えば、携帯と携帯メールは互いに本音を言い合う、さらけ出す、そういう人たちの方が使っている。

利用者に限定して利用頻度の相関を見ても、たくさん使うほど己を出し、全部さらけ出しながら友人とつきあうと答える傾向にある。ですから、先程言いました、精神的自己防衛という説明は妥当かどうか、はっきり言ってあまり数字的には妥当しないのではないかと思います。選択的コミットメントに関して言えば、メディア利用とは何も関係ない。

それで、最後になりますが、結局今回の調査で言える範囲で、かつ我々の調査の質問の仕方、ワーディングで言える範囲という限定があることは承知していますし、いろいろ批判はあると思います。「あんな質問で本当のところは分からない」とか、信頼性の問題もあるでしょう。今回の調査で言える範囲でいうと、結局、深い付き合いを好んで本音をぶつけあう、そういう付き合いを好む人ほど携帯電話とか携帯メールで友人と頻繁に連絡をするという傾向が強い。そして例えば、よく言われるように、携帯メールのアドレス帳のようなものの存在で選択的接触傾向が増幅されているかといえばそういうことは全くみられなくて、まず若い人はあまり選択的接触しているとは言えないし、メディアとの関係は全くみられない。

結局、インターネットの場合でも言いましたが、携帯でコミュニケーションとか対人関係がどう変わるかという、メディアを使ったから、あるいは使わないから変わるということは決して言えない。もともとそんなのはなくたって、ある一定の傾向があってメディア、特に携帯に関しては、触媒的にそれを増幅する作用があると思います。例えば端的な

例は家族との連絡です。これは数字で出していませんが、北欧で携帯メールを使う場合は家族との連絡が非常に多いと言われてます。それを調べた例がいくつかあります。日本の場合は家族との連絡頻度は非常に低いのです。メールは家族との連絡を阻害、低減させるかといえば、そうではない。もう少し詳しく見てみると、もともと食事を一緒にする機会が多い家族、もともと家族との会話時間が長い子は、携帯でも家族と連絡をするのです。逆に、もともとあまり家族と食事しないし、家族の会話時間が短い人は、携帯では当然連絡はしない。結局、家族関係に関して言えば携帯は触媒として働いて仲のいい和気あいの家族はますます和気あいであり、もともと霞がかかったような暗い家族は、携帯を持つとさらにバラバラになるということのを助長する傾向があるかと思っています。それから、昨日の高橋先生の話にもありました新しいコミュニティの展開について。これについてあまり考える機会がなく、携帯のコミュニティはまだあまり研究していないのですが、結局、「日本で」という言い方はいいかどうかは別にして、日本でもいろいろ携帯掲示板とかあるのですが、今までになかった新しいコミュニティなんかは産まれるかといえば、そんなことはない。日本という風土は、ある一定の限定があって、携帯が出てきてもそれ以前の状況を増幅するだけで新しいコミュニティは産まれたりしないのではないかと。何回か僕は書いていますが、例えば携帯研究で、5、6人の関係というのがあるのですが、この仲間とは非常に頻繁に連絡をする。これを「心理的同居人」と言います。昨日、尾関先生に英語のほうを紹介していただいたサイコロジカルネイバーフッド。電話が登場したとき、心理的隣人というカテゴリーが出現したと言われましたが、日本の学者は、携帯電話はもっと親しいということで、心理的には同居人だということで、心理的同居人とい

う言葉を与えた。携帯フレンドとも言います。それで、携帯でそういうのができたと、私も言ってきたのですが、よくよく考えてみれば、例えば、女子高生で昔からよくトイレットフレンドというのがあります。一緒にトイレにいく友達のことで、それが携帯持って一緒に連絡するようになっただけで、携帯で新しい関係ができたとは言えないのではないかと。この5年間、携帯電話とかインターネット、特に携帯を追ってきて、段々日本的メンタリティとか文化とか、そういうこととの関連で説明することのむずかしさを自覚するようになってきました。

秋山：秋山です。よろしくお願いします。

昨日は、どちらかというミクロ的なお話をしたと思うのです。今日もその続きとしまして、3つくらいに分けてお話をしたいと思っています。

一つ目は、昨日も申しあげましたように、カオスイン・カオスアウトという現象をどういうふうに考えていったらよいか。

それから今日の橋元先生の話ではないですけど、社会の全体像をいろいろ調べてみると、我々が認識していることと全く違うことがたくさんあると思います。しかし、その片方で、少数派の病理があります。この2つを区別して考えていくことが重要だと思います。

今後このような情報化社会の中で、人々はどうのように生きていくのか。どのような関係性をもつのかを考える必要があると思います。例えばメディアによって本当に自己実現があり得るのか。昨日、提言をいただいたので、そういうことも考えてみたいと思っております。

まず現代社会で自己実現はどうかと言われますけれども、自己実現というのは、人によって様々に分かれています。昔の地域共同体の時代ですと、決められた自己実現といえますか、他者から自分の道を決められて、地域で貢献することが自己実現することである

という思想があるのです。しかし現在の消費資本主義社会の中では、どれをやってもいい、自分自身の考え方で自由にやっていいということがある。そのような意味でいうと人間本来の自己実現があるように感じます。そして、時代的なプロセスでいうと、戦前は、基本的な欲求、マズローでいえば、基本的な欲求という目標に中心が置かれていて、それがある程度満たされると安全の欲求がでてくる。現在は、ある程度安全も確保され、所属・承認の欲求や自尊の欲求に視点が進んでいる。例えば橋元先生もおっしゃったように、携帯電話が何故友達関係の中で頻繁に行われているかということ、結局、実際的に所属する場所がない、遊び場がない、溜まる場所がない。それがたまたま携帯電話になった。また、一家の電話というのではなく、その本人にダイレクトにつながるところで安心感がある。そういう意味で、所属・承認の欲求をどのように受け止めるか。そして全体像から見ますとセルフエスティームいわゆる自尊の欲求がかなりないというのは確かだと思います。例えばメディアが、セルフエスティームを若者たちにいかにして還元していくかがポイントだと思うのです。自尊の欲求が出てこない限りは、本当の意味での自己実現というのはあり得ないのではないかと思います。そういうことで、その辺をやはりいろいろ考えていかなければいけないのではないかと思います。

例えばこの問題は、1980年代くらいから出てきていると思うのです。同時に一部の特殊な病理、いわゆる境界例も1980年代ぐらいから出てきているわけなのです。例えば、特に境界例でも一番大きいのは、人格障害でした。問題は、その対象者が小さいころ虐待を受けていたり、親の養護が行き届いておらず、いつも世間の目を気にしながら、自分自身がどのように社会に認められるかを考えるがそれだけに一喜一憂して本来の社会性や自分らしさをなくしていくある意味での発達障害と

いえるのではないのでしょうか。不安や他者への不信頼、そして方や依存したいという欲求これを繰り返しながら歪んだ自己愛や社会生活を送ってゆく。精神年齢も3歳～7歳ぐらいでとどまっている。人間は本来周りに認められたい存在であるわけですがけれども、この症状には、自分がわがままの状態、子どものような状態でいながら、どう人に認められるかだけを努力するという歪んだ行動があるわけです。そのために例えば自分と相手との関係がうまくいかなくなるとその関係を保つために、脅したり、自分自身の体を傷つけたり、人の立場を揺るがすというような行動を取ることも多いのです。

特にインターネットが普及してきた段階の中から、(全体としてはそうではないのですが)一部バーチャルの世界に入っていくという人格障害の人たちがどんどん増えてきてしまって、それが大きな問題となっている。それをクローズアップしてメディアが囃し立てたということも一つの要因だと思います。その少数派である患者さんを、どういうふうにして社会化させるかがこれからの課題の一つだと思うわけです。全体としては橋元先生のおっしゃっているように、なんら調べる意味がないのでないか。今まで通りのコミュニケーションが実際には存在しているという意見も正しいと思います。しかしながら少数意見にも目を向けなければいけないのではないかと思います。特に現代人に特徴である「傷つきやすさ」が大きな問題となっていて、インターネットによって癒す人もいます。その辺の人達をどうするのか。例えばそのことに関しては、1980年代に小此木先生が、「ジゾイド人間」の中でも言っているように、人間と機械であれば、機械のほうが欲望の満足相手として、確実に安定感があると。人のように余計な気を使わなくてもいいし、余計なお世話をする必要がない。その中には悲壮感ありませんし、罪悪感も伴わない。

一部のそういう人たちが、結局、ネットの中で自分自身のわがままな精神をどんどん増幅させて、そしていろいろなトラブルを起こしている。それに対してインターネットの管理者は病理の専門家ではなく、インターネットの管理者であり、対応が困難なことも現実です。そういう病理といいますか、2割くらいの人たちは、ネットの中で引きこもっているわけです。そのような人達をどういうふうにして今度は変えていくかということが私の研究課題です。メディアの立場から考えますと、視覚を優先し、ユーザーが欲しいと思う情報を流そうとします。その情報にユーザーは飛びつき、思い通りに自分自身がコントロールして手に入れようとしています。例えば携帯電話でもそうだと思うのですが、フェイス・トゥー・フェイスだとなかなか言えないけれども実際携帯電話を使っていくと、いろいろなことが言える。自分自身の本音も言えるし、いろいろなことが出てくると思います。メールもそうだと思います。若い人たちが「リセットする」とか、「やめる」ということをよく言うのですが、常に自分が傷つかないスタンスを保てる状況をマルチメディアは持っていると思います。本来のフェイス・トゥー・フェイスのコミュニケーションではどのように人間の自尊を引き出していくかを考えてみると、不幸とか苦痛とか悲しみを、一度心の中に入れて、人の悲しみや苦しみを一旦感じるということがすごく重要になっていると思います。しかしインターネットの中では、なかなかそれが出来づらいという所があると思います。どっちかというと、携帯なんかでやっている場合には合理的にリセットする傾向がある。もしも相手の言い分や自分の意見を言って相手と合わなければやめてしまう。そしてそこで関係性を中断してしまう。相手のほうがそのような振る舞いに対して不安や動揺を感じ、自分勝手にさまざまなことを想像し、感情的になることがあると思います。そ

こら辺をどういうふうに管理するかということが大きな問題になると思います。

ネットも、現在がやはり過渡期であって、もうしばらくするといろいろな状況が変わってきて一般化して、おそらく昨日も話をしたカオスアウトの状態になるのではないか。その状態になってくると、「全く今まで何があったのだろうか」と、不思議なように、それが過ぎてしまうのではないかということです。

グローバリゼーションの中では、自分の規範とか地域に根を張って頑張って生きていようと思っても、他から、いろいろな思想とか言語とかが入ってくるわけで、特に職場とかメディアとか社会状況とか知識とか、様々な角度から統合されていくと思われるわけです。

自分がそういう中できちんと生きていたとしても、地盤全体が揺り動かされれば結局は、その人自体も揺り動かされると思うわけです。例えばその他に、住んでいる人の特性、地域の経済とか法とかも変化するし、人間関係の間合いの取り方も変化していくと思うわけです。それにどういうふうに対処していけばいいのかがおそらく今後の課題になっていくと思います。ただ、これも今後の研究題材であって、なかなか私自身が行き着いていないわけですが、それも考えていかなければいけないと思います。

それに輪を掛けて、現実世界の今までの仕事だけではなくて、最近ではバーチャルの中でも仕事ができるようになってしまっています。そうすると地域の人々が社会常識の意識を変えて一般化していかないと、結局新しい社会規範は生まれてこないと思うわけです。今までの規範の中で、拘って生きている人たちというのはどうなるのかというと、リストラされたり、「生活＝仕事」と思っている人は仕事からあふれたり、いつの間にかカオスの状況に陥ってしまっているのではないかと思います。とりあえずそのままの規範を追随し

ていたとしたならば、おそらく中間層といわれる、中間意識を持っている人たちも、そのうちに新貧困層の位置づけになるかもしれない。社会の流れや意識の変革をどう一般化するかもメディア時代の中では重要な課題になってくるのではないかと、それは2点目の意見だと思います。

あとは、意識の中で、現実世界とバーチャルのバランスをどういうふうに取ってくるかということも考えなければいけないと思います。

ネットの中にはいい加減な世界もあって、そこに一部の人がのめり込んでしまうと、道徳性から外れてたり、逆に正義性が強くなって、例えばメールの中で攻撃し始めるということも出てくるわけです。一番多いのは、ネットに依存している人たちは、自分が誰かに愛情を得ようとするという欲求がどんどん増えてきて、しかもその中で周りから意見や反論が出てくるとなんか邪魔されているのではないかと感じる。自分の安住の地が失われるかもしれないという不安が大きくなる。だからフェイス・トゥー・フェイスとネットでの違いというのは、不安の状況が違う。見て分かる状態と、見て分からない状態という両方に分かれてくるわけですね。そうするとネットの中で一番大きい問題というのは、姿としての隣人、ネットは見えない隣人であり、現実には見える隣人と屈託のない意見を交わせるか交わせないか、話を具体的にできず、不安の迷路にはまっていく状況など、その不安がすごく違うのではないかと、ますます不安が大きくなるということも一つの大きな要因だと思います。例えばネットによって自分がどんどん不安を増幅させ、邪魔している者があるとしたならば、それを追っ払ったり自虐的になったりして、なんとか愛情を得ようという気持ちが全面に出て、そして愛情が手に入らないと思うとますます不安や焦りが出て、逆に邪魔する者を憎んだり、そこでトラブルを

起こしているのではないかということです。ですから不安とか焦り、他者からの自己否定感をどう解決するかということも一つ考えていかなければいけないと思います。

それから自己否定感というのは、現実の場面で自己肯定感を体験するしかない。だから自分自身がいろいろな場所で自己肯定されていることを感じながら本来の自分を取戻していかないとその状況は治らないと思われます。

確かにネット上の中で、自由になって、自発的になるかもしれませんが、それはうまくいっているときに限られている。そういうことで安心できる場をどういうふうにネット上に創造するかということが重要になってくると思います。

動機付けの問題ですが、インセンティブデバイドがあると思いますが、動機付けというのは何なのか。動機付けをどういうふうにするかということは、やはり新しいものと古いものをどういうふうに融合させていくかということが、まず一つにあると思います。そうすることによって、おそらく動機付けというものが段々一般化してくるのではないか。一番議論されているところでは、「教育よりも動機付けがあるかないかが大きな社会問題である」というような議論もあります。その動機付けをどういうふうにメディアに求めるのか。その辺は逆に先生方にお聞きしたいと思います。

やはりリアルなコミュニケーションを体験する場所が必要。その場所がただ単にネット上に変わっただけではなくて、実際のコミュニケーションを体験する場、特に感覚、知覚、実感が分かる場所ということを創造していくことが必要になってくる。

スポット的な状況から全体像を見据えるという教育が必要だと思います。近年の一般論は全体像を悲観論にしていく傾向がある。そうすると社会全体がマイナスになっていきま

すし、楽観論が出てくると社会はプラスになっていく。特にカオスの状態の中では楽観論の形成をどういうふうにするか、その秩序や経過をどういうふうに変えていくかということが重要になってくるのではないかと思います。

特に実体の経験を伴ったコミュニケーションというのはどうなのか。例えば、私が考えているコミュニケーションの一つに昨日もお話しました世代間交流をどう意図的に、地域の人々に理解してもらうのか。現在の流れの中では集まるだけでなく、インターネットを使いながら世代間交流をするかもしれない。もうひとつではフェイス・トゥー・フェイスで会うかもしれない。まずはやりやすいように、どういうふうに企画的にやっていくかが大きなポイントになってくると思います。今までのような断片的なものではなくて、どういうふうにこれから繋ぐかということが、我々の一番大きなポイントになっています。確かにできるかどうかは分かりません。どうすればできるのかを考えていかなければならないかなと思っています。

それから、パラドックスの問題とかいろいろありましたが、その辺は後でまた出ましたらお話ししたいと思います。

どちらにせよ、結局一部の人たちがネットの中でモラトリアムをやっているわけですが、そのような人たちに対してもラベリングしなければ、段々変わっていくのではないかと思います。「問題だ」ってラベリングしているところに大きな問題があると私は感じています。

とりあえずまずは楽観論を中心としながら、どういうふうにして、新しいコミュニティを創造していくかを私はこれからまた研究していきたいなと思っています。

以上です。

尾関：私は、昨日の残りの部分、情報化社会のゆくえということでお話ししたいのですが、

その前に忘れないうちに、昨日高橋先生からの得たコメントをいただいたので、それについて先に若干答えさせていただきます。

これからお話しすることとも非常に深く関係しているのですが、一応あらかじめ回答させていただきます。

一つは、環境問題と情報問題との対比ということで、情報問題が資本主義システムに対して親和的であるという表現を使ったことに対してです。これは確かに使いすぎかなという感じはしながら、親和的という表現を使ったので、これはもう少し適切な表現があったほうが良いというふうに思います。けれども意図は分かっていたかと思いますが、情報問題と比較すると、環境問題の場合はどうしても成長主義に対する反対というのがかなり基本ベースにありますから、「IT 革命」と「環境革命」という言葉が 21 世紀のキーワードとしてある場合、やはり IT 革命というのは、皆さんご存知のように、ある種の経済効果というか、成長主義の非常に有力な手段として IT 革命が語られるわけです。それを環境革命というのと比べてみると、その落差というか、その対照性というのは、非常に大きいものがあると思います。だからそういうことを念頭において使ったのですが、親和的という言葉は少し言い過ぎなので、やはり情報メディアというものの反システム性というか、そういう面もいろいろあるという点は確かにそうなので、そこところは修正させていただきます。

それから、2 点目。これも私が少し迷ったところを言われたのですが、電子コミュニティの光と影というところの 3 番目に、コミュニティを巡ってということで、そのサブタイトルとして、「電子コミュニティか地域コミュニティ」かという表現ですが、これも上の 2 つの表題からすると、誤解を生む表現かなと思います。

最初私は、「電子コミュニティと地域コミュ

ニティ」というふうに両者を結んでいたのですが、電子コミュニティについてサイバースペースのイメージがあって、「サイバースペースかエココミュニティか」というようなサブタイトルにしようかなということがあって、エココミュニティの場合には私としては地域性と電子コミュニティも利用するという意味も含めてエココミュニティということで使おうと思っていたのですが、エココミュニティということ自身があまり馴染みもないし、ということで、「電子コミュニティか地域コミュニティか」という誤解を生む二者択一を書いてしまったので、これを書くとなれば「電子コミュニティと地域コミュニティ」というほうが適切だろうと思います。エコロジーの視点から地域コミュニティを基礎にしながら、電子コミュニティをどう活かして、いわゆるグローバルな展開とローカルな展開を図っていくかということが私自身の立場で、この二者択一というのは必ずしも私自身の考えではないということです。ここのところは「電子コミュニティと地域コミュニティ」ということにしていただいたほうが良いと思います。

もう一つの要望みたいなお話は、脱近代へ向けてのメディアの活用ということで、これについて具体的な生活空間の中でのお話がもう少しあればということなのですが。

これは、昨日の続きの中で少し触れさせていたきたいと思います。

レジュメに戻りまして、情報化のゆくえということで、先程の話と関係しているのですが、この電子メディアの時代は、昨日の話からいえば人類史において大きく分けて 3 段階、中井正一においては充分その重要性が認識されていなかった電子メディアという段階です。その本格的な始まりの最初の段階に我々はいらるだろう。これはインターネット、携帯という、そういうものが予兆だろうと思います。そういう意味では人類史のなかで、ある時代を画する段階に入りつつあるのでは

ないかと私は思います。したがって、先程の橋元先生のデータというのは重要な意味があると思いますけれども、ただ現在は、始まりの始まりというところがあり、おそらくいろいろデータを取っても揺れるところがあるのではないかと私自身は思います。

それから先程ご指摘にあった、文化的特性を超えたものがあるのではないかというのは、私もそうではないかという気がしています。

そのことからすると、印刷メディアにおいてピークに達した文化は、近代の数百年という年数がかかって定着した一つの生活様式です。その生活様式のなかで、電子メディアにもとづく生活様式が支配的になってくるにつれて、どういう問題が起きてくるのだろうということを我々はあらかじめ認識しておく、あるいは議論しておく必要があるだろうという問題意識が私自身にはあります。

というのは、やはり環境問題を考えると、恐らく近代産業革命以降、散発的には、例えば日本でも田中正造の場合のように、日本の近代化においてもエコロジーの問題というのはあるのですが、充分認識がなかった。しかし、20世紀後半になって公害から地球環境というレベルになって近代の産業革命なり、資本主義的発展というもの大きな環境的ダメージを与えたというのが改めて認識された。それは近代以降追求してきた「豊かさ」というものが生活様式として定着されて初めてそういうダメージがあるということが大きく認識され、新たな生活様式が語られるようになったということを考えるなら、やはり今の電子メディアに基づくコミュニケーション、ソーシャルコミュニティというものが、どう我々の生活様式を作り上げていくのか、それに対して我々がアクティブにどう働きかけることができるのか、それは政治経済システムとどう関わっていくのか、そういうことについて議論していく必要があります。それ

は社会情報学というのを専門にされている皆さんにとっても大きな意味があることではないかと思います。

極端な言い方かもしれませんが、その意味では大きく2つの可能性があります。端的に言えば、近代をさらに更新していくような「超近代」の方向か、あるいは近代を超えていく「脱近代」の方向かという大きな方向付けがあると思います。

先程の資本主義システムへの親和性についてお話しし、それからIT革命ということと成長主義との関係ということもお話ししましたが、やはり、大きくみれば（皆さんご存知と思いますが）、ハーバマスという現代の著名な哲学者が新たな社会理論を構築するに際して、生活世界とシステムというものを対置して、「システムによる生活世界の内的植民地化」というテーゼを現代社会の診断ということで出したわけです。その場合彼は、前近代においては生活世界に組み込まれ、生活世界の文化的、コミュニケーション的な統制にあった経済政治活動が近代以降自立していった、目的合理性、経済的合理性を追求する中で市場経済と国民国家が社会システムとして自立化していくと考えた。さらに、その独立したシステムが資本主義的な利潤追求の推進力というものによって肥大化していく。そしてそのシステムの論理が生活世界に入り込んでくる中で、言葉によるコミュニケーション的な行為による生活世界の再生産というものが貨幣メディアや権力メディアによって阻害されていく。そこに様々な病理が生じてくる事態を「生活世界の内的植民地化」と呼ぶという議論です。そして、「新たな社会運動」は、こういった植民地化への抵抗運動として生じてきているとしたのです。こういった見解を提示した彼の有名な『コミュニケーション的行為の理論』が出されたときには、多くの言語に翻訳され、皆さんご存知のように世界的な議論になったわけです。

この図式は、それ以前のマルクス主義のように、いわゆる市場経済や国民国家の権力を単に否定的に捉えるのではなく、市民的共同性によるコミュニケーション的合意によってコントロールしていく点が重要です。近代における国家行政とか、市場経済の自立化というもののある種の合理性を認めた上でコントロールしていくということです。それは従来のマルクス主義の階級闘争主義的な社会観に対して、現代における新たな事態に対応した一つの社会理論の方向を構築したわけです。

その脈絡でいうと、やはり現代の科学技術というの、市場経済システム、政治行政システムというものと並んで大きな科学技術の諸制度というものがシステム化していつている点、今日我々が見落とすことができない大きな点ではないかと私は思います。これが、グローバル化といわれる中で、今の大学・学術の再編成というの、民間、企業、研究所も巻き込んでその再編成が起こってきているということと深く関わってきていると思います。

科学技術のシステム化というものの、情報技術というのはある種の特異なポジションを占めているのではないかと感じるのも私は持っています。もちろん、科学技術というものがシステムの中の歯車ということで、生活世界の中に浸透してくる中で様々な病理が起こってくるというのがある。例えば、携帯などが普及してくるというの、一つの言い方からすれば、生活世界のコミュニケーションのあり方の問題であると同時に、それはシステムが生活世界の中に入っていく、植民地化していくという話の方向から見ることができる。秋山先生が病理現象として問題されているというのは、まさに生活世界の植民地化の一環として情報技術、それがメディアという仕方、生活世界の中に入っていく。その先ぶ的な兆候を秋山先生なりに見ておられるのではないかと私は思います。

ただ、他の科学技術一般と違う、メディアに絡む情報技術の特異性というのは、非常に大きいのではないかとことです。これは、先程から言っている電子コミュニティのポジティブな社会的な面というのが、これまでいろいろ語られている面がありますがそれに関係しています。それは一つには公共圏の問題です。公共圏の問題というの、もともとハーバマスに関係しています。市民的公共圏というの、最初に注目したのがハーバマスです。近代において、市民たちが自由に議論し合う。カフェや新聞メディアなどを使って自由に議論できる場、市民的公共圏の形成として国家権力に対抗する一つの大きな意味を持ったという議論です。

しかし、市民的公共圏自体は、よく批判されていますように、女性や労働者を排除した、いわゆるブルジョワといわれる市民たちの場であったということで、ハーバマス自身もいろいろな批判の中で公共圏の議論をより深く展開して行っている。

日本においても、この間、公共性について、シリーズの大きな講座が出るとか、様々な大きな関心があったと思いますが、やはり今日のメディアコミュニケーションというものが、公共圏を拡大深化していくという点では、積極的な意味がある。これはいろいろな意味で言えると思います。ただ、電子メディアによる公共圏というものが中心になるとは私は思いません。やはり様々な人々が実際に対面的に議論し合う場、それはある種の原型です。その原型みたいなものが基礎におかれながら、電子コミュニティとしての公共圏というものが活用されていくということが重要だと思います。

私が思うのは、一般的に言って現代の中で、電子メディアの種類の多様性ということで、「多メディア時代」ということがあると同時に、やはりもう一つは、人類史のなかで、口頭で話し合うメディアを基礎とした歴史的な

メディアの多様性をも意味する。まさに身体性と関わる、そういう話し合うという身体性を踏まえた実際の直面的対話が出発点です。それから第2段階として、書き言葉、さらに印刷技術というものが展開していくわけです。そういう様々なメディアというのが、捨てられて無くなっていくわけではない。現代においても、様々なデータから、たとえば橋元先生のデータからして、電子メディアが入っていったからといって家族の間のコミュニケーションが急にどうにかなるというわけではないというデータからも理解されるように、ある種の積み重ねのようなどころがあるわけです。問題はむしろ口承文化、それからオングの言葉でいえば、声の文化、文字の文化、電子メディアの文化というのが積み重なっていった、それらがうまくコーディネートされていくような、そういうものが一つ非常に重要だと思います。それがどういう形を取るのかというのが、やはり今の岐路にある。したがって、多様なメディアの中で、電子メディアのほうが個々人において圧倒的なウェイトを占めているような事がある場合に病理とか、そういうことも語られると思います。

いずれにしても、私が最初に、人間存在の三つの側面ということで、理性的存在、社会的存在、自然的存在というふうに述べましたが、この三つの側面は、ある種の重層性があります。人間はやはり基底的な意味で、自然的、生命的存在である。これは今言ったような身体の身振りも含んだ意味で、直接語り合うというレベルの重要性と対応しているわけです。社会的な存在であるということは、まさに書き言葉なりのメディアによって拡大した歴史的な共同体なりが作りうることに対応している。もちろん他面では、文字というメディアは階級社会の支配の道具にもなるわけです。

それから理性的な存在というレベルがあるわけです。近代というのは、理性的存在とい

うレベルが非常に大きなウェイトをもった時代でもあるということです。これは昨日の西垣さんに関わっての話では、近代においては、理性的存在というものが社会的存在なり自然的存在というあり方を圧倒するような仕方人間存在のあり方というものが捉えられています。

そういうなかで、理性的存在というあり方が、近代社会システムに促されて、ある一つの形態としてメディアコミュニケーションというものに専ら適応するようにウェイトがかかってくるならば、これはいろいろな意味で問題が起こってくるだろうということもあるのではないかと思います。そういう意味では我々は人類史の中で様々な生み出してきた、この多様なメディアがそれぞれの固有な特性において活用される、現代の多メディア時代、そこにおいて、様々なメディアをいかに編成していくか、それをどうプリンプルな仕方と考えていくかという問題が重要なところにあると思います。

参考資料の6ページで、「近代の機械論的要素主義的思考の拡大」、Bとして「人間と自然との五感を通じての直接的な触れ合いの現実体験の縮小」というようなことを書いてあります。これはあくまでも先程言った情報技術というものが、メディアという形をとって、いわゆる生活世界の内的植民地を進めるような方向に方向づけられるという場合に、こういうことが起こってくるのではないかと思います。

それに対して、やはりそういうのとは違った方向、産業主義的な、資本主義的な方向とは違った、オルタナティブな文明の方向というのを目指す必要があるだろう。これはエコロジー的な視点からすれば、ある意味では、そうせざるを得ない。人類が生存していくためには、長い目で見れば、近現代文明を脱却していく方向を取らざるを得ないというところがあるわけです。しかしエコロジーの問題

というのは非常に難しいのです。景気が悪くなるとすぐに、「とにかく経済的な成長をしなければ駄目だ、失業者をどうするのか」というような話になって、自由時間を拡大するとか、労働のシェアリングという方向、エコロジーに結びついていくような視点というものを語るのがなかなか難しいという現実があるのではないかと思います。従って、電子メディアの活用に関しても、そういう方向を切り開くよりも近視眼的な話になってしまうわけです。ただ、この間、私が何度も言っていますが、電子メディアの定義づけ、方向づけということで、「成長主義の手段から持続可能性の手段へ」と書いていますが、一つの方向としては、その点の意識化というものがやはり決定的に重要ではないかと思います。

これは随分以前にトフラーの『第三の波』という本が話題になって、その後、あまり議論はされていないわけですが、電子メディアと社会のありようへの一つの視点を提供している点では、私自身は今でも面白い議論の種にはなるのではないかと思います。

ご存知のように、トフラーの第一の波というのは農業革命です。第二の波は工業革命、産業革命。第三の波が情報革命という話です。テクノロジー中心主義というのでしょうか、トフラーにはそういうものの見方の傾向もあるのですが、しかし彼が第三の波である情報革命によって何を期待しているのか。その期待している点は、私はかなり今後の現代社会の、あるいは情報化社会の方向づけを考えていく上で、サジェスションするものが今でも大枠としてはあるのではないかという気がします。

そこに書いたように、トフラーの作った言葉ですが、「生産消費者」という言葉があります。「プロシューマー」という言葉ですが、生産者が同時に消費者でもあるというあり方を、今後情報メディアが実現していくのではないかという議論とか、「エレクトロニック・

コテッジ」というのは、通勤なしの在宅の仕事というものを可能にしていくのではないかと、というような言い方です。これもある意味ではいろいろな見方があって、むしろ、資本の論理に利用される云々という話もあります。彼の意図としては、生産と消費の分離の克服です。この分離が第二の波の中心的なものであった。つまり自分のために生産することから、交換のための生産に変わっていくということが、市場の全面化という第二の波の世界を作り上げたということです。

そういう生産と消費の分離というものが克服されていくというのが脱市場文明ということで、彼はテクノロジー、とりわけ情報メディアに期待したところがあるのです。

そこで、引用していますのでちょっと読んでみますと、「第二の波とは対照的に第三の波の文明は、第一の波の社会と非常によく似た特色を持っている。例をあげると、集中化を避けた生産、適切な規模、再生可能なエネルギー、非都市化、家庭内労働、高度な生産＝消費活動（プロサンクション）などである。ここには弁証法的回帰ともいえるべきものを見ることができる。」という言い方をしているわけですが、トフラーの議論で重要なところは、彼にはやはりエコロジー、環境問題に関しての意識が基底にあるということです。この点も私は注目すべきところだと思います。したがって、トフラーの議論はある意味では情報メディアの今日的な始まりの頃にかなり大胆に提起したもので、いっぱい問題点がありますが、眼目は、グローバル化した市場をコントロールして適正な規模にまで縮小していく、そして脱市場的な領域を拡大していくために、情報メディアを積極的に活用していく、或いは科学技術一般を活用していくという方向を示唆していると私なりに読み込むことができます。

今朝テレビを見ていて面白かったのは、エコロジーの風力発電です。だいたい風力発電

機というのはすごく高いらしく、1億円、2億円するのです。巨大な風力発電ということではいろいろなところに設置されています。しかしテレビを見ていたら、日本で考案されたもので、ひとつひとつの家庭に設置できるような非常に小さな風力発電機で、ある程度の電力が賄えるというのをやっていました。それぞれの家にその風力発電機をつければ、その家の電気をかなりの程度賄うことができます。そうすると市場を通して電力というものを購入してくるシステムと並んで、それぞれの家庭においてある種の生産と消費の分離みたいな話は、(ある一つのメタファみたいな話なのですが、メディアの活用ということで、市場とは無関係な、エコマネーとか、そういう話もありますが、)そういうのも情報メディアを活用することで展開できるということがある。

高橋先生の質問で、具体的な生活空間の中で何ができるのかという質問があったのですが、そういう点からすると、様々な仕方では、そういう生産の場面で、科学技術を含めた電子メディアを使っているいろいろなことが考えられる。それと同時に、私が一つ大きいと思うのは、先程の公共圏との関わりで話せば、(最近皆さんも関わっておられるかもしれませんが、)例えば少し前の法人化の反対運動で、メールを使ってネットワークづくり等もあった、最近の都立大関係の「意見の会」ですか、そういうところに、メールを使っている政治的な公共圏づくりの試みもみられるわけです。そういうものも長い視点から見れば、公共圏を積み重ねていく一つの試み、様々な多様な公共圏を作り上げていくプロセスにおけるものかと思います。

それから、公共圏ということで思い出したのですが、メディアコミュニケーションの場合、ある種の異文化的なコミュニケーションを公共圏において成立させる可能性が容易である。もちろんそれだけでは駄目だと思いま

す。それは出発点であって、対面的な公共圏との絡み合いの中で異文化的な公共圏というのがより具体的に登場してくると考えられる。

話が脇にそれてしまいましたが、最後に「マルクス再考」と書いているのですが、旧ソ連、東欧の崩壊以降、マルクスの人気は悪くなり、マルクスから何か、学びうるかという話もあります。私はやはりマルクス主義とマルクスは区別して、いわゆるソ連型マルクス主義が崩壊したなかでこそ、先入見なしにマルクスから学びうるもの、そういうものが出てくるのではないかと思います。

ここには書いておきませんでしたが、特にエコロジー的な面です。ソ連・東欧においていろいろな環境破壊があったので、その元はマルクスの考えだという議論があり、マルクスはエコロジーとは無縁どころか有害だというエコロジストもいます。しかし、『マルクスのエコロジー』というかなり大部な本も最近出ていますが、マルクスの中には、ともすれば急進的なエコロジストが、政治経済的なシステムの有り様というものを十分に問題にしていくという視点を欠いているのに対して、エコロジーの関連でも大きなヒントを与えるものがあると思います。

情報化の問題についても、これは私が前から言っているのですが、やはりマルクスの交通概念、ファケア(Verkehr)という概念がある。労働と交通というのはマルクスの若い頃から重要な概念であった。この交通というのは物質的な交通だけでなく精神的な交通を含めた広い意味で、マルクスは労働と並ぶ大きなカテゴリーとして位置付けていた概念です。極端な言い方をすれば、ソ連型マルクス主義というのは、交通のほうを切り捨てたと言ってもいいと思うのです。労働概念をもって専ら社会理論を構築していったところが、大きな問題でもあるのではと思います。そういう点から考えると、もう一度マルクス

を読み直して、ファケア、即ち、交通・交流・交際・交換、そういうものを一切含む広いカテゴリーとしてのファケアというものを十分に考慮してマルクスの社会理論、歴史理論なりを再解釈するなら、これはやはりメディアの意義を原理的に考えていくうえでも、大きな示唆があるのではないか。ここで引用しておいたのは、『経済学批判要綱』の有名な三段階論、前近代、近代、近代を超えていく、そういう歴史的な視点として交通概念が、個と共同体のあり方の議論と関係させられて、資本論に先立って書いたものです。(こういったマルクスの基底的思想を「労働と交通の内的連関」としてとらえて、その視座のもとに

私なりに現代の人間と社会の理解を展開したものに拙著『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』がありますので、ご一読いただければと思います。)

私としては、インターネットに象徴されるような情報メディアの展開と同様に、エコロジーということについても、マルクス自身は、おそらく今日のような地球環境に及ぶようなものが念頭にはなかったと思うわけですが、マルクスの社会理論を、もう一度生けるものと死せるものを押さえたうえで再構築して、脱近代というものを展望していくことに寄与させることが重要であると思います。